



宮城学院の植物たち その1

宮城学院女子大学 一般教育部准教授 木村 春美

この短いコラムでは、宮城学院の敷地内、特に遊歩道を彩る植物をご紹介しますと思います。とはいえ、専門家ではありませんし、ただのオタクのひとりごとであることをご理解ください。

まず、ご紹介したいのはカタクリです。ユリ科の多年草で、古くは堅香子（カタカゴ）と呼ばれていたようです。春の訪れを告げる「春の妖精」（スプリング・エフェメラル）の代表的植物で、雪解けとともに葉っぱが顔を出します。発芽1年目から1枚だけ地上に葉を出した姿が春に数週間見られます。7-8年後に2枚目の葉を出すと、そこでやっと花をつけます。カタクリは虫の助けを借りて受粉を行う虫媒花で、さらにはアリに種子を



2014年4月16日撮影

運んでもらう仕掛けも用意しています。カタクリとアリの共生関係については次の機会に譲るとして、特にお天気の良い日中は大きく花を開き、その紫色の姿は清楚でありながら華やかでもあります。それは実のところ切実な理由によるものなのでしょう。宮城学院の遊歩道を歩いていくと、数箇所群生しています。温暖化の影響か開花は年々早くなるようで、実習館のピアノプラクティスルームの南側斜面は3月末には満開となりますが、弓道場下あたりの日当たりの悪いところは、4月中旬まで楽しむことができます。

ます。

万葉集の「もののふの 八十娘らが 汲みまがふ 寺井の上の かたかごの花」(もののふの やそおとめらが くみまごう てらいのうえのかたかごのはな)は、大伴家持の詠んだ歌です。水を汲みに集まった少女たちと、うつむきかげんに咲く薄紫色の花は、作者の目にはどちらにも現実だったのか、乙女たちを見て堅香子の花を思ったのか、堅香子の花を見て乙女たちを想像したのか、いずれであったのだろうかと考えてしまうのは素人の妄想的解釈にすぎませんが、どちらにしても、待ちに待った春の訪れを喜ぶ、軽やかな気持

ちが伝わります。山や森歩きに出かけカタクリに出会うと、毎年のことなのに、躍る心を抑えられません。

象潟出身の版画家池田修三氏の作品に、「かたくりの花」と題した木版画があります。カタクリの花を眺めている、あるいはカタクリの花に語りかけているような少女を描いた作品です。この時、少女は何を思っていたのだろう、何を語りかけたのだろう、そう思いながら眺めているのがとても好きで、にかほ市を訪れたときにこの版画の絵葉書を見つけ買い求めました。毎年カタクリの花の季節になると、部屋に飾っています。

仙台市在住の漫画家いがらしみきお氏が、この「かたくりの花」に「そのあと」と題した詩を寄せています。版画で描かれたシーンのその後に、この少女が何を思い、何をしたかを想像しながら書いたものようです。この版画の第一の魅力はもちろんこの少女の仕草や表情にあるのですが、この作品が人々の想像力を掻き立てる一因は、少なからずカタクリの花にもあるのではないかと思います。写真は2017年にせんだいメディアテークで「まちびとプロジェクト」主催で行われた池田修三木版画展「ワンピース」会場にて撮影したものです。にかほ市象潟郷土資料館の許可を得て掲載しています。



2017年8月21日撮影

以前は350円の切手がカタクリのデザインでした。オークションサイトで見ると高値がついています。カタクリの球根で片栗粉を作っていた時代は遠い昔で、現代の片栗粉は主にジャガイモのデンプンを使っています。今では保全の対象となり、各地でカタクリ群落の再生が進んでいますが、この愛らしいカタクリが「昔は里山のあちこちに自生していた花」などとなってしまうことを願ってやみません。

謝辞) この文章を書くにあたり、にかほ市象潟郷土資料館、三重県四日市市メリノール女子学院（現四日市メリノール学院）元国語科教諭高木直美先生、本学学芸学部日本文学科の九里順子先生、生活環境科学研究所の藤原愛弓先生、資料室の佐藤亜紀さんにお世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。